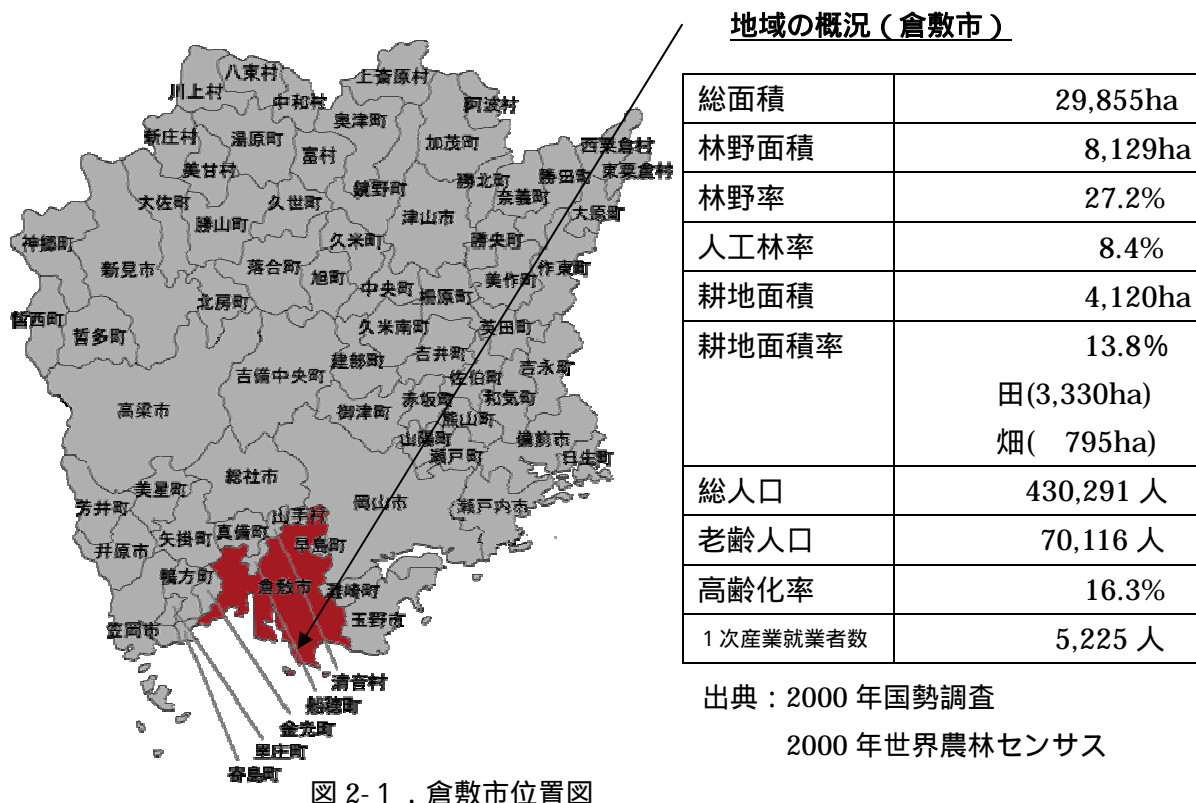


<インタビュー編>

1. 岡山県倉敷市「漁村の特性や伝統を活かした町づくり」



1. 地域の概要

倉敷市は、岡山県の南部に位置し、瀬戸内海沿岸都市であると同時に、中国地方の交通の拠点として古くから栄えてきた。新幹線・山陽本線・伯備線・瀬戸大橋線などの鉄道網と山陽自動車道・瀬戸中央自動車道といった高速道路網が市内で交差し、広域交通網の結節都市の位置づけとなっている。総面積は 298.55 km²、人口が約 43 万人と、瀬戸内海岸の中核市として位置づけられている。気候に恵まれており、古くは稲作のほかに、綿花やい草の栽培が盛んであったが、昭和 30 年代から水島臨海工業地帯が形成され、重化学工業を基幹産業としてまた、繊維産業を地場産業として、工業・商業・サービス業・農業・漁業が調和よく発展している都市である。

倉敷の歴史は、さまざまな物資の集積地としての賑わいによって、江戸時代に幕府の直轄地となり、代官陣屋が置かれていた。同時に、新田開発により農地が増加し、綿花の栽培のため、周辺の人々が集まり商工業の発展をうながした。備中、美作、讃岐の米、綿、油などが陸路・水路を通じて集荷・搬出されるようになり、繰綿問屋、米穀・肥料問屋などの倉庫が次々と建設され、商業の中心地としての地位を得ていった。

倉敷市の南、児島半島の先端にある下津井は、瀬戸内海に面し入り江が天然の良港として重要な役割を果たしてきた。江戸時代中期以降、秋になると北海道の干しニシンやニシン粕を積んだ北前船が、山陰の海から下関を通過して下津井港に立ち寄るようになった。下津井からは塩、木綿などを積み込んで北国へ荷を運んでいく北前船による交易が、この地域に大きな繁栄をもたらした。



写真 2-1 下津井漁港は潜水漁も盛ん

2. 取り組みの内容

倉敷市下津井地区、下津井漁協壮青年部の取り組みについて調査をおこなった。

倉敷市下津井地区は、現在（2004年12月末）2,339世帯8,305名が暮らす地域である。かつて、江戸時代には風待ち港として、また軍事上の重要な拠点として城が築かれ、城下町3万2千石を謳歌した歴史ある港町である。また、近年では瀬戸大橋がこの地域から四国に架けられており、開通時には多くの観光客が足を運んだ。漁業も盛んで、港の沖にある速い瀬戸では「うおじま」とよばれるように、産卵にくる魚の群れが海の中の島に見えらると言うぐらい、豊富な漁場であった。2003年度における下津井漁協の組合員は、199名であるが、過去10年で半分に減少し、同時に3分の2が60歳以上の高齢者で、すなわち組合員の減少と高齢化が深刻な状況になっている。



写真 2-2 潜水漁による「たいらぎ貝」が特産物

下津井漁協青年漁業士、大崎周治氏にお話をうかがった。この地域の漁業は、「底引き網」、「一本釣り」、「潜水器」、「蛸壺漁」、瀬戸の早い瀬を利用したイカナゴやマナガツオを獲る「袋待ち網漁」が盛んにおこなわれている。特に、潜水によるタイラギ貝の漁が盛んになっている。また、トラフグやノリの養殖なども盛んであるが、全体的には近年の魚価の低迷によって苦しい状況が続いている。

大崎氏を中心に取り組まれている、下津井漁協壮青年部による取り組みは下記の通り。

浜辺のクリーンアップ作戦。県漁連の企画として、港・浜辺を美しくということで、年2回10年間にわたって取り組まれている。

地元の小学校を対象に、漁業の体験学習をおこなっている。

「海づくり」と題して、トラフグの受精卵・ふ化仔魚の放流などを通じた「つくり育てる漁業」に取り組んでいる。

地元の伝統行事の復活に取り組んでいる。

「下津井漁協おさかな朝市」や「魚島フェスティバル」を通じて、新鮮な魚を安く提供し、下津井を広くアピールするイベントに地域の人々と連携し取り組んでいる。



写真 2-3 なまこ壁が美しい下津井の路地



写真 2-4 かつて繁栄したしるしとしての旧家が多く残る町



写真 2-5 干しダコなど漁村の佇まいが残っている

2 - 1 . 取り組み主体

下津井の取り組みは、漁業協同組合の壮青年部によって支えられている。組合員 199 名の内、26 名が壮青年部に所属しているが、その目的は資源の減少や高齢化による漁業の衰退傾向に対して、地域漁業を活性化させるため 1989 年に結成された。同時に、この地域の活動は、海の特産品を開発する研究会や下津井を考える会などの市民グループを巻き込んで取り組まれている。

2 - 2 . 取り組みの経緯と概要

1989 年に結成された漁業協同組合の壮青年部の取り組みは、「海づくり」、「人づくり」、「地域づくり」という三つの柱で取り組まれている。当初は、「ゴミの持ち帰り運動」や「ヒラメの養殖」から始め、次第に地域に波及する活動に拡大している。

「海づくり」として取り組まれてきたのが、まず「ヒラメの養殖」と「トラフグの種苗生産・中間育成放流」事業である。すなわち、近年の漁獲高の減少と中国からの輸入の増加による価格の低下の対策として、中間育成という栽培型の漁業に取り組んでいる。ここでは、2000 年度から取り組まれているトラフグの受精卵放流・ふ化仔魚放流について下記に記す。

1988年度には、水揚げ50t金額にして1億4,000万円もあったトラフグの漁獲が、2000年には、水揚げ約5t金額にして1,000万円程度と、10分の1以下に低下してしまった。この状況に危機感をつのらせ、取り組まれたのが受精卵の放流である。初年度は、県の水産試験場の協力を得、2,000万粒の受精卵を放流した。その後順調に技術開発や協力体制が整備され、近隣の漁協とも協力しながら事業を拡大している。2003年には、1億2,000万粒の受精卵が採取され、ふ化率も53%と上昇し、毎年放流量が確実に上昇している。このような取り組みによって、漁獲高の増加が期待されている。

このような取り組みは、最初のヒラメの中間育成から始まり、トラフグの育成へと発展し、現在ではクルマエビ、キジハタなどに広がっている。同時に、壮青年部の取り組みが地域へと波及し、ヒラメ・トラフグの受精卵・仔魚の放流は、地域の子供たちに「海の日」の記念行事として実施してもらうようになった。また、クルマエビなどについても、種苗の運搬・飼育・放流を隣り合う漁協と協働でおこなうなど、地域を越えた連携の環が広がっている。

「海づくり」活動では、恵みをいただいている海をきれいにとの考えから、ゴミの持ち帰り運動を始めたが、現在では年に2回の海岸のクリーンナップ作戦が展開され、漁協関係者と地域の人々が協働で事業をおこなっている。



写真 2-6 下津井町並み保存地区

「人づくり」活動と題して取り組まれているのが、地元の小学生やその親を対象にした

体験学習である。海の日記念行事として、下津井西小学校PTAと協力し、漁業についての学習・種苗の放流・海浜清掃を中心とした体験学習である。2003年には、総勢70名の親子が参加し、「漁業について」学んだ後、六口島に漁船で渡り、ヒラメとトラフグの稚魚を放流した。子供たちの参加の動機は海水浴であるが、実際に稚魚の放流や漁業の実際を学ぶことにより、地域の歴史や漁業についても興味を抱くようになってきていると、関係者の方が話されていた。

この体験学習は好評で、県と協力、不登校やひきこもりの小・中学校の子供たちにメニューを提供し始めている。「渋川青年の家」の子供たちを漁船に乗せ、底引き網漁業の体験学習を実施した。このプログラムは大変好評で、子供たちに笑顔が戻り、心にも良い影響が与えられたと評価されている。このような体験学習は大変好評であるが、漁協スタッフの人数の制約もあり、特別な場合を除いて地域の小学校に限定し運営されている。



写真 2-7 かつては北前船が寄港し反映の姿をしのばせる資料館

「地域づくり」として取り組まれているのが、「下津井漁協朝市・魚島フェスティバル」である。「若いものに魅力あるまちにしたい」、「下津井の子供たちに、わたらの子供の頃、経験した祭りや海のおもしろさを伝えていきたい」という、壮青年部とその先輩たちの思いを形にした取り組みである。この思いから、「新鮮で安い魚を提供しよう」、「地元の祭りを復活させよう」、「子供らへも海への関心を取り戻してもらおう」という具体的なアイデアの実現がなされてきた。

「下津井漁協おさかな朝市」は、漁協の荷捌き所で毎月第 2 日曜日の午前 5 時から開催されているが、早朝の下津井に、多くの人々がやってくる定期イベントとして定着している。同時に、この朝市を通じて、地域の関係者がサワラや下津井タコなどの特産品を開発し、販売するなど、大きな波及効果が出始めている。同時に「魚島フェスティバル」は、毎年 5 月中旬開催される地域の大イベントに育ってきている。下津井で水揚げされた魚や食料品の青空バザール、トコハイ下津井節踊りなどの出し物が披露されるなど、多くの観光客を呼び寄せる下津井を代表する行事に成長した。このような、1989 年に始まる取り組みから新たに復活したのが、30 年間途切れていた「祇園神社」の夏祭りの御輿担ぎの復活である。壮青年部が音頭を取り、当時のことを知っているお年寄りたちからの聞き取りや、写真の調査から昔の祭りを少しずつ再現する取り組みを 1997 年から始めた。下津井の祇園神社夏祭りは、かつて 3 台の御輿が町を勇ましく練り歩き、最後に船に乗せ岬を回って鳥居前に着船し、そこから参道を担いで上る勇ましい姿をみせていた。この祭りを、壮青年部が中心になって、地域の若者や子供たちのために復活を果たした取り組みである。祭りの復活に当たって問題になったことは、御輿の再建であった。祇園神社に保存されている御輿は、昔から伝わる金箔の豪華なものであるが、復活の年に海に放り込んでしまい、神社から使わせてもらえなくなった。つまり、自分たちで御輿を作ることを迫られた。そこで、住民の方々を説得し資金提供を促すと同時に、船大工の協力を仰ぎ再建にこぎつけた。このような、地域の一体となった取り組みが、先祖から続くお祭り行事を復活させることとなった。

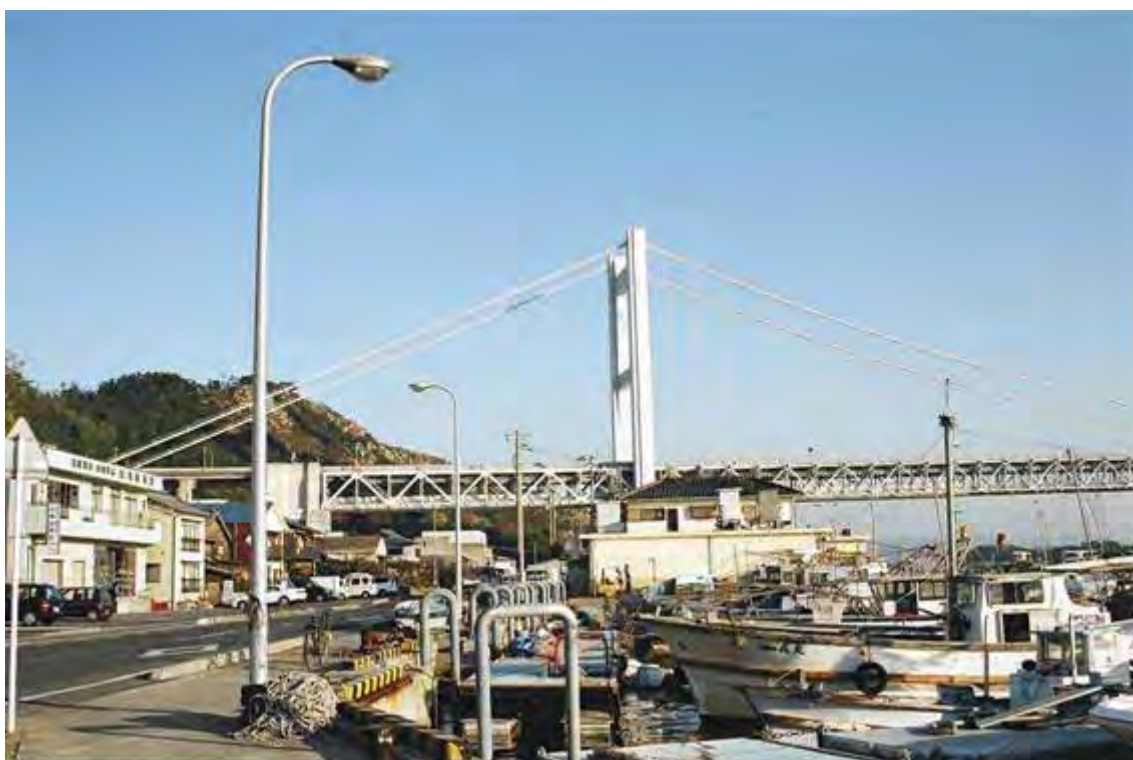


写真 2-8 中国四国横断橋の下に漁港は位置する

2 - 3 . 取り組みの効果と成功要因

漁協壮青年部の取り組みによってもたらされた効果として「海づくり」活動からは、周辺漁協との協働の環が広がり、事業の効率的・効果的な実施体制が整えられた。ヒラメやトラフグの資源の増大は、漁家経営の安定にもつながる。「人づくり」活動からは、地域の子供たちにさまざまな体験を通じて漁業や地域での思い出を形成するのに役立ち、学校や地域の人々との接点が深まり、結果的に後継者の育成につながっている。「地域づくり」活動からは、下津井の新鮮な魚を安く提供するイベントとして定着し、下津井を広くPRする場として評価されている。同時に、地域の伝統行事の復活を期に、下津井全体が協力し合い、さまざまな課題に一体となって取り組むことができるようになった。

このような取り組みを成功させた大きな要因は、漁師の先輩が常に言っていた「わしら漁師のような一次産業は、地域と一体とならにゃーできん」という、地域に向けたまなざしを、後輩の壮青年部が受け継ぎ具体的なアイデアを次々と実行して行ったことによる。特に、過疎化・高齢化が進むことに対する危機感から、このような視点を持って取り組んで事業をおこなったことが重要なポイントである。